

## BOOK REVIEW

分類の発想

中尾 佐助 著 朝日選書

あなたが職場に通うのに使う最寄りの駅から自分の家までの道のりを思いかえしてみてください。横切る店の一軒一軒、曲がる角ごとの家々の様子を、どれだけ濃密に思いだすことができるでしょうか。考えて見れば記憶の中で、これほど意識することなく、しかし紛うことなくひとつの道筋をたどれる場面というのは、私たちの生活の中では他にないのではないのでしょうか。

今ではあまり聞きませんが、かつて寄席の中で、ものを覚えるということを見せ物にする芸があったといいます。客席から投げられた思い思いの言葉に、番号をつけて覚えこんでいき、次に客席から番号をかけてもらって、その番号に対応することばを即座にこたえてみせる、というものです。最後には覚えたすべての言葉を一から順番に最後まで並べて読み上げて終わるのですが、この芸は、自分にとって最も馴染みのある街角の風景や家々の様子に託して、客から投げられた相互に関係のない言葉を覚えていくことにそのタネ明かしがあったといいます。

ところで、記憶するという行為自体は、我々が日常的に行っていることですが、記憶することについて考えてみる、ということは、どうでしょうか。

著者は自分自身を観察した結果、記憶する、という行為は、記憶される体験自体（タクソン）と、それを思いだすための鍵（コード）に分けて考えることができ、さらにコードには連想コードや時間コードといったものが設定できる、と考えます。先ほどの寄席の例でいえば、芸人は客席から投げられたランダムな言葉（タクソン）に対して、自分に馴染みのある街角という連想コードと、さらに自分がその中を歩く、という時間コードを設定することによって、記憶を引き出しの中に整理していった、と説明することができます。

タクソンやコードなどという言葉を知ると、何やらコンピュータ用語に似ている気がして一言聞いただけで敬遠されそうではありますが、植物のアイデンティティから図書分類のコードまで、ここに述べられた様々なものや事象を分類、利用するうえでは欠かすことのできない道具のひとつなのです。

本書は自動車のナンバープレートという日常の分類の方法論から進化論の大前提まで、あらゆる事象について思考するための論点と視点を与えてくれる本です。それにしても著者以外のいったい誰が、新聞の天気図と金魚の縞模様を同じ俎上にのせることができるのでしょうか。

「分類は学問や思考のときの小道具だ。いやときには大道具となることもある。」著者のこの緒言は生物学の歴史のうで分類が学問の大道具となった幸福な一時期を思いださせます。リンネの二名法分類がそれであり、そこからダーウィンの系統樹が生まれたことは周知の通りです。

「道具はその使用のとき切れ味がよいことが大事であり、また背景をつくりあげることもある。」著者の道具の切れ味は、思考のルールをつくるだけではありません。植物学を含む様々な思考の体系の中で、新たな発想を提出するための、既存の理論に対する批判＝クリティークの切れ味を、どうか存分に楽しんでみてください。